

比叡山メモ

参考； ウィキペディア

三魔所

御廟ノ森	元三大師廟18	横川	ブナ
天梯ノ森		東塔	スギ ブナ
慈忍和尚廟	尋禪19	横川 飯室谷	

お墓（登山道周辺）

横川	恵心僧都墓	覚超僧都廟	慈恵大師御廟18	
	源信		良源 元三大師	
西塔	寂光大師廟2	伝教大師御廟	別当大師廟	
	円澄	最澄		
東塔	慈覚大師廟3	檀那院覚運廟	智証大師廟5	覚洞墓
	円仁		円珍	
無動寺谷	相応和尚廟	慈鎮和尚廟62		
	建立大師	慈円		

前史

比叡山は『古事記』にもその名が見える山で、古代から山岳信仰の山であったと思われ、東麓の坂本にある **日吉大社には、比叡山の地主神である大山咋神**が祀られている。

最澄

延暦7年(788年)、最澄は三輪山より大物主神の分霊を日枝山に勧請して**大比叡**とし従来の祭神大山咋神を**小比叡**とした。そして、現在の根本中堂の位置に薬師堂・文殊堂・経蔵からなる小規模な寺院を建立し、一乗止観院と名付けた。この寺は比叡山寺とも呼ばれ、年号をとった「延暦寺」という寺号が許されるのは、最澄の没後、弘仁14年(823年)のことであった。時の桓武天皇は最澄に帰依し、天皇やその側近である和気氏の援助を受けて、**比叡山寺は京都の鬼門(北東)を護る国家鎮護**の道場として次第に栄えるようになった。

延暦21年(802年)、最澄は還学生(げんがくしょう、短期留学生)として、唐に渡航することが認められ。延暦23年(804年)、遣唐使船で唐に渡った。最澄は、霊地・天台山におもむき、天台大師智顛直系の道邃(どうずい)和尚から天台教学と大乘菩薩戒、行満座主から天台教学を学んだ。また、越州(紹興)の龍興寺では順暁阿闍梨より密教、儵然(しゃくねん)禪師より禪を学んだ。延暦24年(805年)、帰国した最澄は、天台宗を開いた[3]。このように、**法華経を中心に、天台教学・戒律・密教・禪の4つの思想をともに学び、日本に伝えた(四宗相承)**ことが最澄の学問の特色で、延暦寺は総合大学としての性格を持っていた。後に延暦寺から浄土教や禅宗の宗祖を輩出した源がここにあるといえる。

大乘戒壇の設立[編集]

延暦25年(806年)、日本天台宗の開宗が正式に許可されるが、**仏教者としての最澄が生涯かけて果たせなかった念願は、比叡山に大乘戒壇を設立**することであった。大乘戒壇を設立するとは、すなわち、奈良の旧仏教から完全に独立して、延暦寺において独自に僧を養成することができるようになるということである。

最澄の説く天台の思想は「**一向大乘**」すなわち、**すべての者が菩薩であり、成仏(悟りを開く)することができる**というもので、奈良の旧仏教の思想とは相容れなかった。当時の日本では僧の地位は国家資格であり、国家公認の僧となるための儀式を行う「戒壇」は日本に3箇所(奈良・東大寺、筑紫・観世音寺、下野・薬師寺)しか存在しなかったため、天台宗が独自に僧の養成をすることはできなかったのである。

大乘戒壇の設立は、822年、**最澄の死後7日目に**してようやく許可され、このことが重要なきっかけとなって、後に、延暦寺は日本仏教の中心的地位に就くこととなる[4]。823年、比叡山寺は「延暦寺」の勅額を授かった[3]。延暦寺は徐々に仏教教学における権威となり、南都に対するものとして、北嶺と呼ばれることとなった[3]。なお、最澄の死後、義信が最初の天台座主になった

名僧を輩出

大乘戒壇設立後の比叡山は、日本仏教史に残る数々の名僧を輩出した。**円仁（慈覚大師、794 - 864）と円珍（智証大師、814 - 891）**はどちらも唐に留学して多くの仏典を持ち帰り、比叡山の密教の発展に尽くした。また、**円澄(2代)は西塔を、円仁（3代）は横川**を開き、10世紀頃、現在みられる延暦寺の姿ができあがった[5]。

なお、比叡山の僧はのちに円仁派と円珍派に分かれて激しく対立するようになった。正暦4年（993年）、円珍派の僧約千名は山を下りて園城寺（三井寺）に立てこもった。以後、「**山門（円仁派、延暦寺）と寺門（円珍・5代・派、園城寺）**」は対立・抗争を繰り返し、こうした抗争に参加し、武装化した法師の中から自然と僧兵が現われてきた。

平安から鎌倉時代にかけて延暦寺からは名僧を輩出した。円仁・円珍の後には「**元三大師**」の別名で知られる**良源（慈恵大師）**は延暦寺中興の祖として知られ、火災で焼失した堂塔伽藍の再建・寺内の規律維持・学業の発展に尽くした。また、『往生要集』を著し、**浄土教の基礎を築いた恵心僧都源信**や融通念仏宗の開祖・良忍も現れた。平安末期から鎌倉時代にかけては、いわゆる鎌倉新仏教の祖師たちが比叡山を母体として独自の教えを開いていった。

比叡山で修行した著名な僧としては以下の人物が挙げられる。

円仁	慈覚大師	天台宗の基礎	亀堂	3代
円珍	智証大師	同上		5代
良源（慈恵大師、元三大師	912年 - 985年）	比叡山中興の祖。	18代	
源信（恵心僧都、	942年 - 1016年）	『往生要集』の著者		
良忍（聖応大師、	1072年 - 1132年）	融通念仏宗の開祖		
法然（円光大師、	源空上人 1133年 - 1212年）	日本の浄土宗の開祖		
栄西（千光国師、	1141年 - 1215年）	日本の臨済宗の開祖		
慈円（慈鎮和尚、	1155年 - 1225年）	歴史書「愚管抄」の作者。天台座主。	62代	
道元（承陽大師、	1200年 - 1253年）	日本の曹洞宗の開祖		
親鸞（見真大師、	1173年 - 1262年）	浄土真宗の開祖		
日蓮（立正大師、	1222年 - 1282年）	日蓮宗の開祖		
尋禅 慈忍和尚	19代 座主			
相応和尚	建立大師	千日回峰行の祖	無動寺開創	
覚洞		場所はわかっているが覚洞が？		
覚運		檀那流の祖		
覚超		密教教学に秀で、密教関係の著作を多く残し、その後覚超の流派は台密川流と称された		

籠山行

比叡山の修行は厳しい。山内の院や坊の住職になるためには三年間山にこもり続けなければならない。**三年籠山**の場合、一年目は浄土院で最澄廟の世話をする侍真（じしん）の助手を務め、二年目は**百日回峰行**を、そして三年目には**常行堂**もしくは**法華堂**のいずれかで**90日間修行**しなければならない。常行堂で行う修行（常行三昧）は本尊・阿弥陀如来の周囲を歩き続けるもので、その間念仏を唱えることも許されるが、基本的に禅の一種である。90日間横になることは許されず、一日数時間手すりに寄りかかり仮眠をとるというものである。法華堂で行われる行は常坐三昧といわれ、ひたすら坐禅を続け、その姿勢のまま仮眠をとる。

十二年籠山では**好相行**が義務付けられており、好相行を満行しなければ十二年籠山の許可が下りない。好相行とは浄土院の拝殿で好相が得られるまで毎日一日三千回の五体投地を行うものである。**好相**とは**一種の神秘体験であり、経典には如来が来臨して頭を撫でるとか、五色の光が差すのが見える**という記述もあるが、その内容は秘密とされている。早い者で1~2週間、何年もかかって好相を得る者もいるという。

千日回峰行（比叡山） 北嶺大行満**大阿闍梨**

7年間 1-3年 4-5年 深夜2時発 30Km 6時間
100日 200日

5年700日 満行後 堂入り
無動寺明王堂 9日間一実質7.5日
断食 断水 断眠 断臥 4無行
深夜2時 不動明王に水

堂入り 満了

生身の不動明王 = **阿闍梨**

この時から自分のための自利行から衆生救済の他利行

6年目

赤山禅院往復 60Km 100日

7年目

前半100日 84Km 京都大回り

後半100日 30Km

満行後

2-3年以内 100日間 五穀断ち
7日間 断食断水 十万枚大護摩供養（火炙り地獄）

相応和尚が平安時代にスタート

境内

根本中堂と回廊

比叡山の山内は「東塔（とうとう）」「西塔（さいとう）」「横川（よかわ）」と呼ばれる3つの区域に分かれている。これらを総称して「三塔」と言い、さらに細分して「三塔十六谷二別所」と呼称している。このほか、滋賀県側の山麓の坂本地区には本坊の滋賀院、「里坊」と呼ばれる寺院群、比叡山とは関係の深い日吉大社などがある。

三塔十六谷二別所

東塔-北谷、東谷、南谷、西谷、無動寺谷

西塔-東谷、南谷、南尾谷、北尾谷、北谷

横川-香芳谷、解脱谷、戒心谷、都率谷、般若谷、飯室谷

別所-黒谷、安楽谷

東塔

延暦寺発祥の地であり、本堂にあたる根本中堂を中心とする区域である。

根本中堂（国宝） - 最澄が建立した一乗止観院の後身。現在の建物は織田信長焼き討ちの後、寛永19年（1642年）に徳川家光によって再建されたものである。1953年（昭和28年）に国宝に指定された。入母屋造で幅37.6メートル、奥行23.9メートル、屋根高24.2メートルの大建築である。土間の内陣は外陣より床が3メートルも低い、独特の構造になっている。内部には3基の厨子が置かれ、中央の厨子には最澄自作の伝承がある**秘仏・薬師如来立像**を安置する（開創1,200年記念の1988年に開扉されたことがある）。本尊厨子前の釣灯笼に灯るのが、最澄の時代から続く「**不滅の法灯**」である。この法灯は信長の焼き討ちで一時途絶えたが、**山形県の立石寺**に分灯されていたものを移して現在に伝わっている。嘉吉3年（1443年）に南朝復興を目指す後南朝の日野氏などが京都の御所から三種の神器の一部を奪う禁闕の変が起ると、一味は根本中堂に立て籠もり、朝廷から追討令が出たことにより幕軍や山徒により討たれる。

文殊楼（重文） [13] - 寛文8年（1668年）の火災後の再建。二階建ての門で、階上に文殊菩薩を安置する。根本中堂の真東に位置し、他の寺院における山門にあたる。

大講堂（重文） - 寛永11年（1634年）の建築。もとは東麓・坂本の東照宮の讚仏堂であったものを1964年に移築した。重要文化財だった旧大講堂は寛永19年（1642年）に完成した裳階つき建築だったが1956年に放火による火災で焼失している。**本尊は大日如来。本尊の両脇には向かって左から日蓮、道元、栄西、円珍、法然、親鸞、良忍、真盛、一遍の像が安置**されている。いずれも若い頃延暦寺で修行した高僧で、これらの肖像は関係各宗派から寄進されたものである。

法華総持院東塔 - 1980年再建。多宝塔型の塔であるが、通常が多宝塔と異なり、上層部は平面円形ではなく方形である。下層には胎蔵界大日如来、上層には仏舎利と法華経1,000部を安置する。

戒壇院（重文） - 延宝6年（1678年）の再建。

国宝殿 - 山内諸堂の本尊以外の仏像や絵画、工芸品、文書などを収蔵展示する。

浄土院 - 東塔地区から徒歩約15分のところにある。**宗祖最澄の廟**があり、山内でもっとも神聖な場所とされている。ここには**12年籠山修行の僧がおり、宗祖最澄が今も生きているかのように食事を捧げ、庭は落ち葉1枚残さぬように掃除**されている。

無動寺 - 根本中堂から南へ1.5キロほど離れたところにあり、**千日回峰行の拠点**である。不動明王と弁才天を祀っている。貞観7年（865年）、回峯行の創始者とされる**相応和尚が創建**した。

大書院 - 昭和天皇の即位にあわせ東京の村井吉兵衛の邸宅の一部を移築したもので迎賓館として使用されている。

阿弥陀堂

灌頂堂

八部院堂 - 790年草創、1988年再建。

西塔

転法輪堂（重文） - 西塔の中心堂宇で、**釈迦堂**ともいう。信長による焼き討ちの後、文禄4年（1595年）、当時の園城寺弥勒堂（金堂に相当し、南北朝時代の1347年の建立）を豊臣秀吉が無理やり移築させたものである。現存する延暦寺の建築では最古のもので**本尊は釈迦如来立像（重文）**。

常行堂・法華堂（重文） - 2棟の全く同形の堂が左右に並んでいる。向かって右が普賢菩薩を本尊とする法華堂、左が阿弥陀如来を本尊とする常行堂で、文禄4年（1595年）の建築である。2つの堂の間に渡り廊下を配した全体の形が天秤棒に似ているところから「**担い堂**」の称がある。

瑠璃堂（重文） - 西塔地区から黒谷（後述）へ行く途中にある。信長の焼き討ちをまぬがれた唯一の堂といわれる。様式上、室町時代の建築である。

黒谷青龍寺 - 西塔地区から1.5キロほど離れた黒谷にあり、法然が修行した場所として有名である。

横川

西塔から北へ4キロほどのところにある。嘉祥3年（850年）、円仁（慈覚大師）が建立した首楞嚴院（しゅりょうごんいん）が発祥である。

横川中堂（よかわちゅうどう） - 新西国三十三箇所観音霊場第18番札所。旧堂は1942年、落雷で焼失し、現在の堂は1971年に鉄筋コンクリート造で再建されたものである。本尊は聖観音立像（重文）。

根本如法塔 - 多宝塔で、現在の建物は、大正期の再建。円仁が法華経を写経し納めた塔が始まりである。

四季講堂（元三大師堂）（重文） - 四季に法華経の論議を行うことから四季講堂と呼ばれる。おみくじ発祥の地である。

恵心院

安楽律院 - 天台宗安楽律法流の道場。